

弥勒の丈六の仏の像其の頸を蟻に嚼まれて奇異しき表  
を示す縁 第二十八

一 紀伊国名草郡貴志里に、一の道場有り。号けて貴志寺と曰ふ。其の村人等  
私の寺を造り、故を以ちて字とす。白壁天皇の代に、一の優婆塞有りて、其  
の寺に住む。時に寺の内に、音ありて呻ひて言はく「痛きかな。痛きかな」と  
いふ。其の音老いたる大人の呻ふが如し。優婆塞、初の夜は路を行く人の病を  
得て参り宿るかと思疑ひ、起きて堂の内を巡りて、見索むれども人無し。其の  
時に塔の木有り。いまだ造らずして淹しく仆れ伏して朽つ。斯の塔の霊かと疑  
ふ。彼の病み呻ふ音、夜ごとに息まず。行者聞き忍ぶること得ず。故に起ちて  
窺ひ看れば、なほ病人無し。然うして寝たる後夜に、常の音に倍して、大地を  
響して大に痛み呻ふ。なほ塔の霊ならむと疑ふ。明日に早く起きて、堂の内を  
見れば、其の弥勒の丈六の仏の像の頸、断れ落ちて土に在り。大蟻千ばかり集  
りて、其の頸を嚼摧く。行者見て、檀越に告知らす。檀越等懐びて、また造り  
副ぎ奉り、恭敬ひ供養す。夫れ聞くならく、仏は肉の身にあらざ。何にぞ痛み

病むこと有らむ、と。誠に知る、聖の心に示現るるなりといふことを。仏の滅  
後なりといへども、法身は常に存り、常に住りたまひて易らず。更に疑ふこと  
なかれ。

村童の戯れて木を剋める仏の像を愚なる夫斫き破り  
て現に悪しき死の報を得る縁 第二十九

二 紀伊国海部郡仁嗜の浜中村に、一の愚癡なる夫有り。姓名詳ならず。  
自性愚癡にして、因果を知らず。海部と安諦とを通ひて往き還る。山に山道  
有り。号けて玉坂と曰ふ。浜中より正南を指して踰えて、秦里に到る。当の里  
の小子山に入りて薪を拾ふ。其の山道の側に、戯遊れて木を剋みて仏の像を為  
り、石を累ねて塔とし、戯に剋みたる仏を以ちて石の寺に居き、時々戯遊る。  
白壁天皇の世に、彼の愚なる夫戯に剋みたる仏を咲ひて、斧を以ちて殺り破り  
て棄つ。而うして去りて遠からずして、身挙りて地に躡れ、口と鼻とより血を  
流し、両の目抜け、夢の如くに忽に死ぬ。諒に知る、護法無きにあらず。何ぞ  
恭敬はざらむ。法花経に説きたまふが如し「もしは童子の戯れて、草木と筆と

類似の説話展開を見せる下巻十七縁は、本説話の舞台となった土地の近隣の地を舞台として  
いる。一 中巻十三縁。  
二 上巻三縁、十二縁。後夜には不思議なことがおきる。  
三 其は上文の「堂」をさす。上文には弥勒菩薩像を安置してあることとみえない。下巻十七縁は本説話の地に近接した地を舞台とするが、「慈悲禪定堂」が盛んであったか。中巻二十三縁、二十六縁、下巻十七縁。  
四 この大縁を世界各地に存する伝説の摩訶目大アリと解する荒俣宏の説はあやまり。和名抄の訓の一部分に「アリ」を含む動物名は、大蟻（オホアリ）、赤蟻（イヒアリ）、飛蟻（ハアリ）の三種。本説話にいう「大蟻」は、この一種。  
五 「仏非」血肉身。二金光明最勝王経。如来寿量品。一〇「雖」仏滅後、法身常存。三宝常住、無有變易。二大般涅槃經後分。上。

第二十九縁 悪業についての現報説話。

二 底本訓釈（左斗和良波部）。  
三 和歌山県海部郡下津町あたり。  
三 「愚癡」人、不識。因果。二 諸経要集。十悪部邪見縁。  
四 和歌山県有田市あたり。五 未詳。  
六 有田市宮原町畑あたり。平城宮出土木簡に「紀伊国安諦郡幡地郷」がみえる。  
七 中巻十八縁。一六 中巻三十五縁。  
八 妙法蓮華経。方便品の取意。

第三十縁 あやしき表（一）の説話。延暦六年原撰本では、本説話が末尾から二番めに位置していたと推定される。

一 下文に「八十有余歳」とみえる。  
二 未詳。本説話以外に所伝をみない。俗姓としてみえる。三 間名干岐を新撰姓氏録。未定雑姓。右京、河内国にみえる三 間名公とは異なることとする説（攷証）、同一とする説（栗田寛の両説がある。干岐は、攷証所引の本居宣長の説に「干岐」韓、諸国王及王族之通称也」とみえる。このころ「干岐」と「額規」とはまったくの別音。  
三 和歌山市あたり。四 一定の行業を達成した僧の称であるが、具体的なことは不明。  
五 下巻四縁。六 和歌山市。下巻十六縁。  
七 山口鹿寺跡がその地か。このあたりの地域の弥勒菩薩信仰の盛行をうかがわせる例に、下巻十七縁、二十八縁がある。八 七二四―七四九年。九 文殊菩薩と普賢菩薩。あるいは、菓王菩薩と菓上菩薩。一〇 七七九年。  
二 造像を完成させるためのもの。経済的、人的な援助。三 桓武天皇。  
三 七八二年。ただし、延暦元年は壬戌。癸亥は延暦二年。八月十九日に改元なので延暦元年の「春」二月十一日は不審、として、延暦二年の誤りか、とする松浦貞俊説がある。下巻三十一縁にも「延暦元年癸亥春二月下旬」とあって本説話と同様の問題を含んでいる。下巻三十二縁の「延暦二年甲子秋八月十日」をも考慮するならば、本説話をたんに誤写としてかたづけることは困難である。四 未詳。本説話以外に所伝をみない。下文に「父」とみえるので、明規は親規の子。五 中巻十九縁。六 下巻二十四縁。七 未詳。本説話以外に所伝をみない。下文に「仏師多利磨」とみえる。八 原文「即從坐起」。九 仏典語。一〇 自分に与えられた命、の意か。三 願望。後代の和文語の「いかで」に同じ。